論文審査の結果の要旨

氏名：神　山　八　弓
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：10 代における中枢性過眠症群と概日リズム睡眠・覚醒障害群の睡眠検査と背景要因の検討

審査委員：（主 査）　教授　權　寧　博

（副 査）　教授　根　東　義　明　教授　兼　板　佳　孝

教授　中　嶋　秀　人

本研究は、中枢性過眠症群（HS）の中核となるナルコレプシーと特発性過眠症、概日リズム睡眠・覚醒障害群（CRSWD）のうちの睡眠・覚醒相後退障害の 10 代の患者の臨床的特徴について検討した研究である。これら疾患は、10 代に好発する代表的な睡眠障害であるが、これらの疾患は深刻な QOL 障害が生じるため、早期から適切な介入が行われることが望まれている。しかしながら、HS と CRSWD は、症候的な共通点も多いため、臨床的な特徴とその明確化が必要とされていた。本研究では、10 代患者のうち、HS と CRSWD の鑑別に有用な睡眠検査指標及び心理・社会的要因の探索を行った。10 代患者連続 130 例について、特性、背景因子、主訴、確定診断を後方視的に検討した。また、終夜睡眠ポリグラフ検査（PSG）及び、反復測定睡眠潜時検査（MSLT）を実施した症例（PSG:65 例、MSLT:63 例）を対象に、疾患間で検査所見の比較を行った。全受診患者 130 例のうち、57 例が CRSWD、39 例が HS と診断され、これら 2 疾患は全体の約 73.8%を占めた。初診時主訴で最も多かったのは、日中の眠気で 57.7%で認めた。HS と CRSWD の睡眠検査における比較においては、HS で睡眠潜時が短縮しており、HS でより強い眠気が認められることがわかった。ナルコレプシーと特発性過眠症においては、ナルコレプシーで REM 睡眠の異常を認める以外に両疾患の夜間睡眠の構造（PSG 所見）、日中の眠気（MSLT 所見）に差はみられなかった。さらに、HS と CRSWD の背景因子の検討では、CRSWD で内向性の性格傾向、適応や精神的な問題が病前から多くみられていたとの結果が得られている。以上から、HS と CRSWD の心理・社会的背景要因の相違が、両群の鑑別に資する情報となり得ることが本研究によって初めて明らかになった。このことは、一般の医療機関においても両者の鑑別が早い段階で実施できる可能性を意味しており、当該疾患の診断及び治療の向上に寄与するものと考えられる。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以　上

令和　3 年　2 月 17 日